

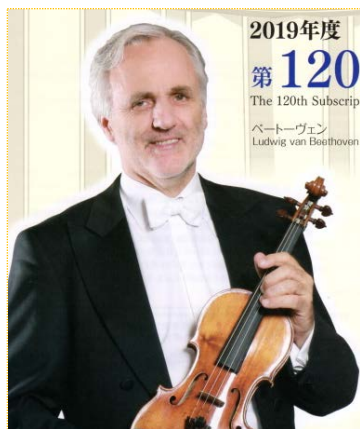
(第35回) 音楽鑑賞会

～紀尾井ホール室内管弦楽団第120回定期演奏会～

2月14日(金)に紀尾井ホール室内管弦楽団(KOC)の第120回定期演奏会を聴いた。翌15日と合わせ、30名のアイアン・クラブ関係者の方々が参加された。

今回はベートーヴェン(Ludwig van Beethoven, 1770-1827)の代表的名曲2曲を揃えた“真っ向勝負”の演目!大いに興味と期待を感じながら紀尾井ホールの席についた。

プログラムは、前半がヴァイオリン協奏曲二長調 Op.61、休憩を挟んで、後半は交響曲第7番イ長調 Op.92である。



で登場する。

この日はアントン・バラホフスキー(Anton Barakhovsky)がコンサート・マスターを務める。そして前半のヴァイオリン協奏曲は、首席指揮者ライナー・ホーネック(Rainer Honeck)がヴァイオリンの独奏者として登場する。

曲は3楽章から成る。第1楽章を聴き、何やら見事な織物を観るような思いに囚われた。荘重と繊細、叙情と勇壮が見事に織りなされ、それをホーネックのヴァイオリンの音色が織り上げてゆく。第2楽章では或る種の落ち着きを感じさせ、繊細さとメロディーの美しさを堪能させる。そして第3楽章では聴いているこちらも身体を動かしたくなるような活気を感じさせる盛り上げで、その見事な織物が仕上がる。カデンツァ(管弦楽の伴奏が付かぬ独奏部分)は、ホーネックの大先輩・シュナイダーハン(W. E. Schneiderhan、嘗てのウィーンフィルのコンサートマスター、1915-2002)の編曲(version)での演奏、との告知がなされていた。

ホーネックの見事なヴァイオリン、そしてそれを実に安定した演奏で支えたKOCの熱演に会場からの拍手・歓呼が止まない。ホーネックとKOCが、ベートーヴェン『ロマンス第1番、Op.40』でアンコールに応え、漸

く休憩に入った。

興奮冷めやらぬ感のなか、後半の交響曲第7番が始まる。後半のホーネックは指揮者である。第1楽章は荘厳な雰囲気始まり、木管楽器(オーボエ)の印象的な音色に導かれてやや哀愁を感じさせ、そして次第に軽快なリズムへと、多彩に曲相が展開してゆく。第2楽章では、調子のよいリズムが心地よく身体に浸透して来る感じがする。第3楽章は、安定した優雅さとリズムの楽しさが混じり合い、実に心地よい響きである。そして最終の第4楽章では、力強い迫力とリズムで頂点に向かって駆け上がる感がする。KOCの演奏は、俗っぽい表現かも知れぬが「ノッている!」と言いたくなる、高い水準の技術に裏打ちされた安定感と一体感を感じさせる、とても印象的なものであった。そして、ホーネックの指揮は、旧い表現を借りれば「自家菜籠中の物」と言いたいような自信を感じさせた。

また、KOCの室内楽の良さを感じさせる規模と演奏は、大規模な交響楽団で聴くベートーヴェンとは違った安心感と爽やかさを感じさせ、音楽と聴衆との距離を縮めてくれるという思いを強くした。聴衆からの鳴りやまぬ拍手は、それを物語っているように感じられる。

このヴァイオリン協奏曲が作曲されたのが1806年、そして交響曲第7番は1811年から1812年にかけて作られている。世界史の年表を開いてみると、1806年はナポレオンの全盛期。1805年には自らイタリア王を兼ね、1806年には弟ルイをオランダ王に就け、この年に神聖ローマ帝国は消滅している。1811~12年はというと、ナポレオンの支配に凋落の兆しが見えてくる時期である。フランス経済は混乱し、欧州周辺国との関係も綻びがみえてくる。1812年にはロシア遠征が始まり、1814年4月には遂にエルバ島に配流されることとなる。これらの作品が創られたのは、正に激動の時代であった。

音楽と政治・社会情勢を直接に結びつけて考える必要はないが、こうした混乱期にこのような美しい音楽が生まれてくるということに、不思議な感慨を覚えてしまう。

何とも楽しいヴァレンタイン・デーの夕刻であった。

(保倉 裕・記)